

信州大学-Curtin University
大学間学術交流協定に基づく
平成 24 年度夏期海外単位認定プログラム実施報告書



信州大学

-2012-



Curtin



平成 25 年 2 月 12 日
信州大学医学部保健学科

【目次】

I.	学術交流にあたって	1
II.	カーティン大学との学術交流を同総会は支援していきます.....		2
III.	学術交流の概要	3
IV.	カーティン大学の概要	5
V.	平成 23 年度夏期海外単位認定プログラム		
1.	はじめに	6
2.	夏期海外単位認定プログラム		
3.	研修期間		
4.	研修場所		
5.	研修プログラム概要	7
6.	参加人数	8
7.	指導教員		
8.	研修費用		
9.	研修日程	9
10.	研修プログラム詳細	10
11.	学生アンケート	14
12.	学生レポート	20

(編集後記)



(表紙の写真は、研修最終日の修了式後、Curtin 大学にて)

I. 学術交流にあたって

信州大学医学部保健学科長 寺田 克

平成 24 年 6 月に文部科学省から出された「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」の答申の中にはいくつかの主要な取り組み事項が含まれています。その中に「学生の双方向の交流の推進」があげられています。これは日本人学生の海外留学の拡大を目指すとともに海外からの留学生の戦略的獲得を目指すというものです。また日本学生支援機構より、平成 25 年度はこれまで行っていた「大学推薦枠」を廃止し「プログラム枠」のみの支援とする予定であるとの通知が昨年 10 月末になされ、同時にいくつかの申請条件も追加されました。

この通知内容とこれまで本学科で実施してきた夏期海外単位認定プログラムの整合性の検討を本プログラム実行委員会中心に行っていただき、ほぼ条件を満たしているとの報告を受けました。次年度も学生さんの負担をできるだけ軽減すべく、すでに活動を開始していただいています。一方留学生の受け入れに関しては、本学科では体系立った取り組みを行っておりません。近年、海外の保健医療学系の学部・学科をもつ大学からの受け入れに関する問い合わせが寄せられており、また学生さんから留学生と交流する機会を設けてほしいとの要望もあることから、今後学科として組織立っての受け入れを検討する必要があると考えています。課題は幾つもありますが、双方向に充実したプログラムが行えてこそ真の学術交流といえます。

さて本年度のプログラムには看護学専攻 13 名、検査技術科学専攻 4 名、理学療法学専攻 4 名、作業療法学専攻 1 名の学生さん 22 名が参加されました。この体験で得た感性や知識が今後の学生生活、社会人生活に有意義に働くよう期待します。また本年度末にはカーティン大学より教員をお招きし、オープンミーティング等の開催を計画しています。本プログラム参加者だけでなく、大学院生を含めた多くの学生さんが参加し交流を深めていただきたいと思います。

本プログラムの運営には、カーティン大学との事前交渉、プログラムの作成、学生へのプログラムの紹介、航空券の確保と準備、支援金の確保、渡航中の学生さんの安全確保等のために多くの教職員が関わっています。また帯同教員不在中は学部の秋期に向けての準備時期にあたるため、在松の教職員の協力が不可欠です。関係した教職員の方々にこの場をお借りし感謝いたします。

本年度も学生さんに対しては日本学生支援機構の留学生交流支援制度(ショートビジット)の採択を受けご援助いただくとともに、本プロジェクトに帯同する教員の渡航費用の一部等を学長裁量経費や同窓会の基金よりご援助いただきました。ご配慮くださった信州大学本部役員の皆様ならびに信州大学医学部保健学科同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

Ⅱ. カーティン大学との学術交流を同総会は支援していきます

保健学科同窓会長 川上由行

今年2012年度も、西オーストラリア州パースにあるカーティン大学における海外短期単位認定プログラムが実施されました。そして、お盆休暇直前の8月11日(土)から9月2日(日)までの3週間のプログラムを滞りなく終了することができました。昨年のように悪天候に見舞われることもなく、順調に総ての日程を遂行することができ、参加学生と帯同教員の全員が、元気で帰国することができました。

パースでの Curtin-Life を十分に満喫された学生さんには、掛け替えのない日々を体験されたことと思います。そしてこのプロジェクトの円滑運営に対して労力を惜しまずに支援された教員各位、そして実際に引率された教員各位には、本当にお疲れさまでした。

新型インフルエンザの猛威の前に残念ながら中止を決断せざるを得なかった年度(2009年度)もありましたが、本プロジェクトは発足以来、着実に成果を上げて来ているのを実感しています。

また、Biomedical Sciences 学部の本学への教員招聘についても具体的な実施の段階になり、新年(2013年)早々には実現する運びになっています。

今後は更に緊密な連携の中で、教員相互間の学術交流、また本保健学科学生、また保健学専攻大学院生とカーティン大学の学生相互間での益々の有効的な交流へと進展して行くことを祈念しつつ、保健学科同総会は、この学術交流を応援して行きます。建設的な意見交換の中でこの素晴らしいプログラムがより一層の輝きを増していくことを信じています。



Faculty of Health Sciences, Curtin University



信州大学医学部保健学科同窓会
School of Health Sciences, Shinsu University

Ⅲ. 学術交流の概要

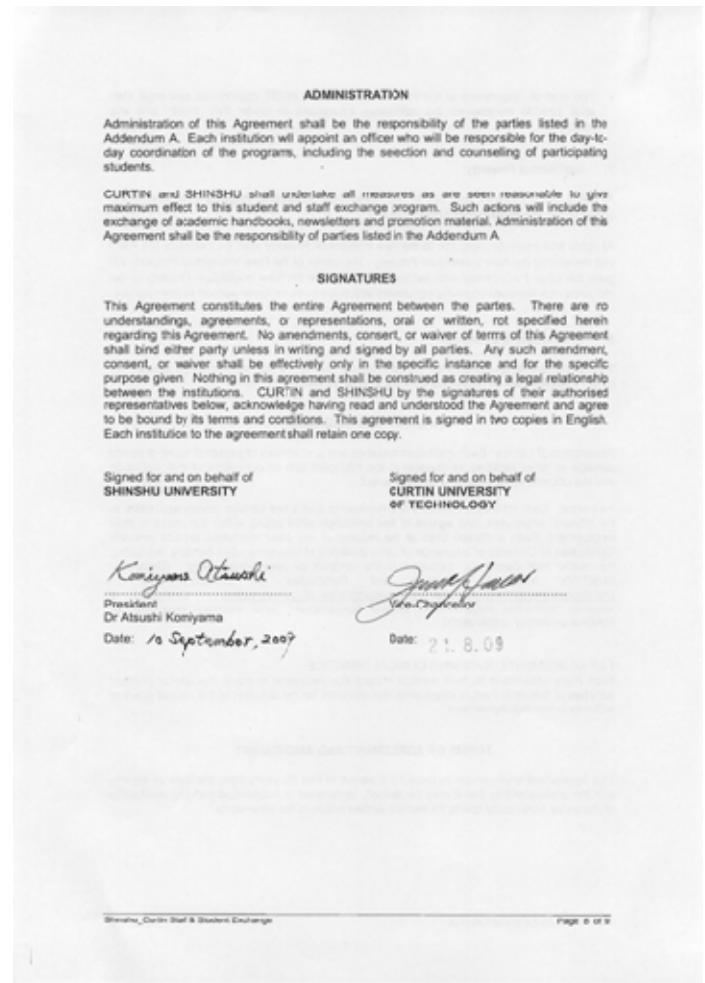
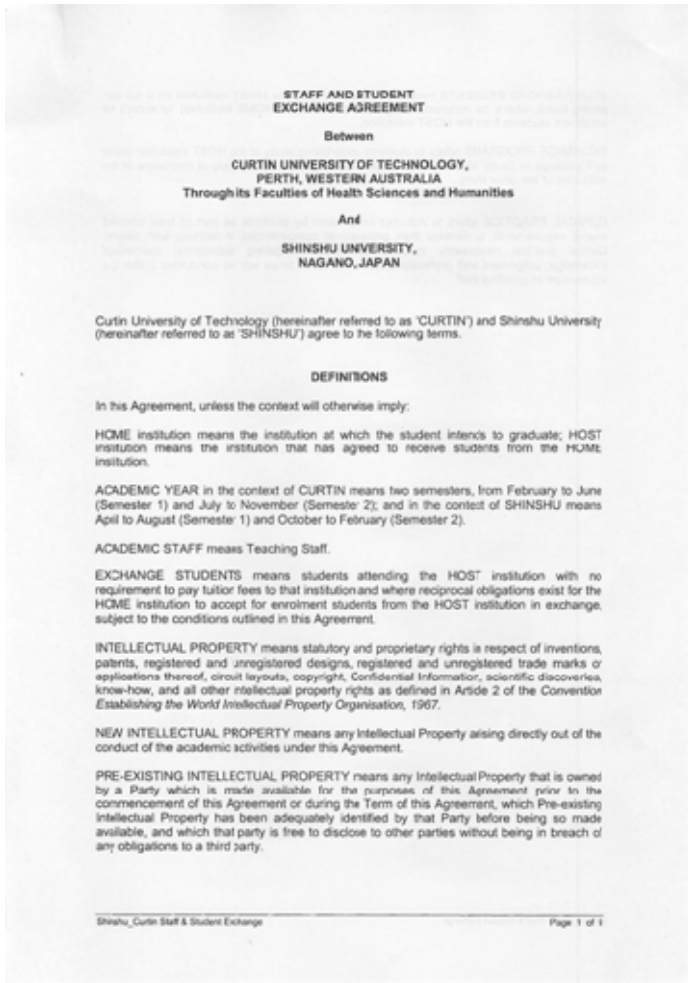
1. 学術交流協定及び学生の交流に関する覚書締結の経緯と交流実績

- 1) 1992年8月、イギリス、ロンドンで開催された第11回世界理学療法連盟学術集会に出席した信州大学医療技術短期大学部藤原孝之教授(現 郡山健康科学専門学校/東都国際ビジネス専門学校 理事・学校長)と、カーティン大学健康科学部ジョン・コール教授との間で教育・研究に関する情報交換が始まった。
- 2) 1997年3月、藤原孝之教授、楊箬隆哉教授(当時)およびゴウ・アー・チェン助手(現准教授)の3名が、カーティン工科大学副学長宛の本学学長親書を携え、健康科学部の遠隔地教育システムに関する資料収集、共同研究課題の打ち合わせを目的としてカーティン工科大学を訪問した。カーティン工科大学学長、健康科学部長、看護学科、医学検査学科、理学療法学科、作業療法学科等のスタッフとの会談の折、両大学間の、より積極的な学術交流が話題となり、教員、学生交流の早期実現に向け検討することで合意した。
- 3) 1998年7月-8月、藤原孝之教授が文部省在外研究員派遣でカーティン工科大学健康科学部理学療法学科客員教授として滞在した折、カーティン工科大学健康科学部スタッフミーティングに出席し、当該大学の多くの教官より大学間交流に関する質問を受け、同大学が信州大学との大学間学術交流に興味を示していることがわかった。
- 4) 1999年3月、本学藤原孝之、楊箬隆哉両教授がオーストラリアに出張した際、副学長ジョン・ミルトン・スミス教授、健康科学部長チャールズ・ワトソン教授、看護学科主任教授マイケル・ヘイゼルトン、理学療法学科主任教授ジョン・コール、国際教育課程担当パメラ・ロバーツ女史等と両大学間の学術交流推進を話題に会談した。両大学の資料を交換し検討した結果、単一学部間に留まらず、広い学際領域での学術交流を目指すことを目標にすることで合意した。その際、カーティン工科大学副学長から大学間協定に関する雛形文書を預かった。
- 5) 1999年4月、学術交流協定を締結した。
- 6) 1999年5月、横浜で開催された第13回世界理学療法連盟学術集会に特別講演演者として来日したジョン・コール教授が、信州大学を表敬訪問し特別講義を行った。
- 7) 2000年8月、学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書を締結。同9月、宮坂敏夫教授(短期大学部長)以下教官、学生20名がカーティン工科大学を表敬訪問し、各学局の国際交流担当者と短期留学の可能性を協議した。帰国後、部長のもとに5名からなるチームを置き、プログラムの実施計画を作成した。
- 8) 2001年8月、信州大学医療技術短期大学部学生32名がカーティン工科大学にて第1回夏季留学・単位認定プログラムに参加した。
- 9) 2002年(第2回)は27名、2003年(第3回)は24名、2004年(第4回)は20名、2005年(第5回)は29名、2006年(第6回)は28名、2007年(第7回)は15名および信大附属病院看護師2名、2008年(第8回)は31名(内大学院生2名)、2010年(第9回)は19名が夏季留学・単位認定プログラムに参加した。
- 10) カーティン教員招へい:2007年1~2月、国際教育課程ディレクター パメラ・ロバーツ、2010年1月、国際教育課程ディレクター アラン・トルク。

2. 学術交流協定及び教員と学生の交流に関する協定書の更新

1999年4月に締結された学術交流協定及び2000年8月に締結された学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書は、2004年4月に信州大学とカーティン工科大学の間で、「学術交流協定」及び「学術交流協定に基づく教員と学生の交流に関する協定書」として更新され、2009年には信州大学国際交流センターを窓口とした大学間協定となり、夏期研修プログラムとカーティン教員招へいが医学部保健学科とカーティン大学英語センター(Curtin English Language Center, CELC)・健康科学部により企画・実施され、両校の交流は一層親密に深められることになった。また、本協定に基づき、信州大学はカーティン大学から短期留学生(学部)を受け入れている。

教員と学生の交流に関する協定書 (2009.9)



IV. カーティン大学の概要

1. 設立

- 1) 1967年: The Western Australian Institute of Technology (WAIT) として創設。
- 2) 1987年: Curtin University of Technology (カーティン工科大学) となる。
- 3) 2010年: Curtin University (カーティン大学) となる。

*カーティン工科大学の名称は、オーストラリア首相を歴任したジョン・カーティン創設者に由来する。パースは日本でも古くから遠洋漁業の基地として知られている。広大なキャンパスを有機的に機能させるため、学内に国際教育担当部門を独立させ、情報ネットワークを整備し、国内外の教育研究機関と遠隔地教育・研究を推進している。1996年から、シンガポール、マレーシア、インドネシア、香港等の教育機関とインターネットを利用した学位取得課程を展開し、実績を上げている。大学院教育では、卓越した教育プログラムが評価され、非英語圏のみならずアメリカ、カナダ、ヨーロッパの留学生も相当数在学している。

2. 位置

- 1) 西オーストラリア州
- 2) メインキャンパスはパース(Perth: 西オーストラリア州の州都。人口約120万)の郊外ベントレー(Bentley: 中心部より10キロ南東へ位置、海岸まで車で20分)に立地し、他にPerth中心部の大学院キャンパスとその他のキャンパス(海外を含む)を有する(Kalgoorlie, Margaret River, Northam, Perth, Shenton Park, Sydney; Malaysia, Singapore)。

Address: Kent Street, Bentley, WA6102, Perth, Western Australia

TEL : 08-9266-9266, HP-address: <http://www.curtin.edu.au/>

3. 学部等

- 1) 学部: 経営学部, 健康科学部, 人文学部, 理工学部, 先住民研究
- 2) 大学院: 経営学, 健康科学, 人文科学, 理工学

4. 学生数(2011年)および

教職員数(2011年)

- 1) 学生数: 63,321人
うち、通信教育課程 16,326人
現地留学生: 10,365人
在外留学生: 9,147人
(オーストラリア外キャンパス, センター在籍)
- 2) 教員数: 1,533人
- 3) 職員数: 1,863人



V. 平成 24 年度夏期海外単位認定プログラム

1. はじめに

信州大学-カーティン工科大学間学術交流協定にもとづき、平成 24 年度夏期海外単位認定プログラムが平成 24 年 8 月 11 日から 9 月 2 日の約 3 週間にわたり、カーティン大学及びパース市内外の関連施設・病院で実施された。本年のプログラムには 22 名の信州大学医学部保健学科学生が参加した。

カーティン大学での単位認定プログラムの実施にあたり、5 月から 7 月にかけて、単位認定プログラム全般のオリエンテーション、研修内容の説明、研修関係資料の配布と事前学習の説明が行われた。

2. 夏期海外単位認定プログラム

- 1) 目的:他大学・文化での学習・生活体験を通じ、国際的視点から医療従事者としての態度を涵養する。
- 2) 本学における単位認定:国際医療協力論の単位として認定する。単位認定には、信州大学、カーティン大学における全てのプログラムに参加することとし、研修レポートの提出が必須である。

3. 研修期間

平成 24 年 8 月 11 日(土)～ 9 月 2 日(日), 23 日間

4. 研修場所

- 1) 研修キャンパス; カーティン大学ベントレーキャンパス
- 2) 見学施設

看護学専攻

Regent's Garden Aged Care Facility, Perth
King Edward Memorial Hospital, Perth
Fremantle Hospital, Fremantle

検査技術科学専攻

Regent's Garden Aged Care Facility, Perth
Perth Pathology Lab, Fremantle
Australian Red Cross Blood Donor Centre, Perth

理学療法学専攻

Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth
Physio Services Bentley Clinic, Curtin University
Independent Living Centre, Nedlands

作業療法学専攻

Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth
Physio Services Bentley Clinic, Curtin University
Independent Living Centre, Nedlands

5. 研修プログラムの内容 (Curtin University)

第1週; Orientation & English Class/Hospital Communication for Health Professional (CELC*)

- ・カーティン大学および CELC のオリエンテーション
- ・ CELC による英語および医療英会話の授業
- ・キャンパスツアー
(* CELC: Curtin English Language Center)
- ・ Excursion (Fremantle: アボリジニーの歴史を学び、民族楽器の演奏を体験)

第2週; Combined Lectures

- ・保健医療領域の合同授業
The Australian Health Care System
- ・ Auditing & Tutorials (看護・検査・理学・作業に分かれて、授業の聴講)
- ・実習(検査技術科学, 理学療法学, 作業療法学)
- ・ Excursion (Swan Valley)

第3週; Combined Lectures/ Tutorial, Practice, Clinical Visits & Graduation Ceremony

- ・専攻別専門領域の授業
- ・アボリジニの文化とライフスタイルについての授業
- ・施設見学
 - ① Regent's Garden Aged Care Facility, Perth
 - ② Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth
 - ③ Fremantle Hospital, Fremantle
 - ④ King Edward Memorial Hospital, Perth
 - ⑤ Perth Pathology Lab, Fremantle
 - ⑥ Australian Red Cross Blood Donor Centre, Perth
 - ⑦ Community Based Physio Services Bentley Clinic, Curtin University
 - ⑧ Independent Living Centre, Nedlands
- ・修了式



現地学生との実習

6. 参加人数

看護学	:	13名(1年生2名, 2年生3名, 3年生7名, 4年生1名)
検査技術科学	:	4名(3年生4名)
理学療法学	:	4名(2年生1名, 3年生3名)
作業療法学	:	1名(2年生1名)

合計	22名
----	-----

7. 引率指導教員

プログラム担当教員

大平雅美 教授, Goh Ah Cheng 准教授, 日高宏哉 准教授, 山崎浩司 准教授

8. 研修費用

研修費用

【内訳1】グループチケット利用

・往復航空運賃(グループチケット)	191,230円
・往復バス代	12,300円
・特別プログラム授業料等	157,000円
英語クラス, 保健学共通講義, 専門別(看護, 検査技術, 理学療法, 作業療法)講義・実習, 施設見学(含む移動費用, 指導支援費用), 緊急事故支援システム料	
・滞在費(3週間)	60,000円(ホームステイ, 食事込)
計	420,530円

現地プログラム担当教員3名分の航空運賃, 宿泊費は信州大学国際交流経費と保健学科同窓会寄付金等から計上された。

研修支援

平成24年度夏期海外単位認定研修は, 独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の平成23年度留学生交流支援制度(ショートビジット)に応募, 採択され, 参加学生22名のうち, 参加申し込み先着20名に8万円の奨学金が支給された。残り2名については, 事前に負担が大きいことを確認, 了承してもらったうえで参加してもらい, 少し廉価な航空運賃となるよう支援した。

9. リスク管理体制

2011年2月のニュージーランド地震時の日本人留学生被災等を踏まえ, 平成23年度からは, 信州大学が正会員となっている特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会(The Japanese Council for the Safety of Overseas Studies; JCSOS)の緊急事故支援システムに加入し, 研修中の不慮の事故に対するリスク管理体制を強化した。本年度も当支援システムに継続して加入のうえ, プログラムを実施した。

9. 研修日程

- ① 8月11日午前11時半30分に信州大学体育館前よりチャーターバスで出発し、午後4時30分、東京成田空港に到着した。同日午後8時50分にSQ(シンガポール航空)11便で成田空港を出発し、翌12日午前2時55分にチャンギ空港(シンガポール)に到着。約6時間のストップオーバーの後、SQ223便(午前9時30分発)に乗り継いだ。
- ② 8月12日午後2時40分パース空港に到着。カーティン大学が手配したバスにてカーティン大学ベントレーキャンパスに移動した。カーティン大学で、国際教育担当者とホームステイ先のホストファミリーの出迎えがあり、各々がホームステイ先に向かった。学生は各ホストファミリーから、ホームステイ先での生活の規則、通学経路の案内(ホームステイ先は大学から徒歩20分の所からバスを乗り継ぎ1時間程度かかる所までいろいろある)、周辺の案内などのオリエンテーションを受けた。
- ③ 8月13日カーティン大学にてオリエンテーション、学生カードの発行などが行なわれた。
- ④ 8月14日～30日の期間、英語および医療英会話の授業、オーストラリアのヘルスケアに関する授業、保健科学領域の授業、専攻別の授業聴講、実習、チュートリアル及び施設見学のプログラムが実施された。プログラムの詳細はP10～に示した。
- ⑤ 8月30日午後1時から Graduation Ceremony が行なわれ、学生が一人ずつプログラム修了証を授与された後、英語でスピーチをした。会場では飲食物がふるまわれ、カーティン大学国際教育担当者や教員たちと学生とが最後の交流を深めた。翌日は自由行動で、各自がキャンパス、パース市内あるいはホストファミリー宅で時間を過ごした。翌々日9月1日にキャンパスに集まり、ベントレーキャンパスからバスにてパース空港に移動し、午後3時55分発チャンギ空港行き(SQ226便)に搭乗した。当日の午後9時20分にチャンギ空港に到着し、11時55分に東京成田空港行きSQ638便でシンガポールを離れ、翌日9月2日午前8時に無事成田空港に到着した。
- ⑥ 成田空港からの帰松は往路と同じくチャーターバスを利用し、9月2日午後3時に信州大学北門到着、3週間の短期留学を終え解散した。



カーティン大学図書館

10. 研修プログラム一覧

Shinsu University Health Sciences Study Tour Program 13th August – 31st August 2012

PROPOSED PROGRAM (**SAA** same as above)

Arrival – SUN 12 August (SQ233 14.40) – Rooms 209.131 & 133 reserved 15.00 – 18.30

Week 1: Nursing Group (Group A) 13 students

Time	Monday 13 August	Tuesday 14 August	Wednesday 15 August	Thursday 16 August	Friday 17 August
10.00 – 12.00	Orientation Welcome Morning tea 211.226 Curtin Student Cards SmartRider Cards Campus tour Judy & Rika	English Class: Introduction to Australian Culture Verena 211.226	Library tour 10 – 10.30 Judy & librarians Meet outside main entrance to library 9.55	Attend ELICOS class to meet other international students	Attend ELICOS class
12.00 – 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	OASIS Login 501.231	English for health professionals Rika 211.226	Tour of Nursing Facilities 1.30 – 2.00 405, level 3 (reception) Alison Baker	English for health professionals Preparation for excursion Rika 402.302	Excursion: 1.30 – 2.00 Didgeridoo Breath (learn Aboriginal history; how to play the didgeridoo Bus depart 12.45 Rika

Week 1: PT/OT (Group B) 3 PT students and 1 OT student

Time	Monday 13 August	Tuesday 14 August	Wednesday 15 August	Thursday 16 August	Friday 17 August
10.00 – 12.00	**SAA**	**SAA**	**SAA** 12.30 OT meet Kirrily Manning, 401 lobby	PT ELICOS class 10am OT tour of facilities, meet 401 lobby meet Jen Buzzard	**SAA**
12.00 – 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	**SAA**	**SAA**	MRSA Testing (Level 1, Building 109) 1.30	1 – 1.30 Tour of PT Facilities meet at 408 physiotherapy reception, 3 rd floor meet Tanis Kelly (join English class afterwards if time) English for health professionals Rika 402.302	**SAA**

Week 1: Biomed (Group C) 5 students

Time	Monday 13 August	Tuesday 14 August	Wednesday 15 August	Thursday 16 August	Friday 17 August
10.00 – 12.00	**SAA**	**SAA**	**SAA**	Tour of Biomed Facilities meet Martin Finn	**SAA**
12.00 – 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	**SAA**	**SAA**	MRSA Testing (Level 1, Building 109) 1.30	English for health professionals Rika 402.302	**SAA**

Week 2: Nursing Group (Group A)

Time	Monday 20 August	Tuesday 21 August	Wednesday 22 August	Thursday 23 August	Friday 24 August
10.00 – 12.00	Lecture: Complimentary Medicine & Natural Therapies Kareen Dunlop 401.002	Workshop: Indigenous Health and Culture (10 – 12) 501.405 (3) 108.116 (3) 300.214 (3)	English for health professionals Rika 201.420	Attend an ELICOS class	Excursion Swan Valley: Caversham Wildlife Park, Sandalford Winery, Margaret River Chocolate factory Bus departs 9am
12.00 - 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	Lecture: The Australian Health Care System (2 – 3) 405.435 Philippa Wharton	Workshop: Indigenous Health and Culture (12 – 2) 303.230 (3) 300.220 (3)	Lectures debrief Prep for excursion Rika 402.302	Attend an ELICOS class	Gill

Week 2: PT/OT (Group B)

Time	Monday 20 August	Tuesday 21 August	Wednesday 22 August	Thursday 23 August	Friday 24 August
10.00 – 12.00	PT Lab: Musculoskeletal Science 252 (PT) Evan Coopes Building 408.2500	PT Lab: Neuro- Science 352 408.2510 Liz Bainbridge OT Lab: Ergonomics & safety science (11 – 1) 408.203 Jen Buzzard	English for health professionals Rika 201.420 OT Lecture: Community based rehab. (10 – 12) 108.102b Kirriily Manning	PT Attend an ELICOS class OT Lecture: Neuropsychology (9 – 11) 405.201 Robyn Della-Franca	**SAA**
12.00 - 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	**SAA**	English for health professionals Marilyn 201.420	**SAA**	PT Lab: Anatomy & Pathology 252 404.101/201 Trudi Fischer <i>** please note, closed toed shoes are required to attend this lab</i>	

Week 2: Biomed (Group C)

TBA = to be advised

Time	Monday 20 August	Tuesday 21 August	Wednesday 22 August	Thursday 23 August	Friday 24 August
10.00 – 12.00	Lab: Pathology 232 A/Prof Vin Williams 308.126	Attend an ELICOS class	English for health professionals Rika 201.420	Lecture: Immunology 12 – 2 310.103B	**SAA**
12.00 - 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	**SAA**	English for health professionals Ross 201.420	**SAA**	Attend an ELICOS class	

Week 3: Nursing (Group A)**University Tuition Free Week**

Time	Monday 27 August	Tuesday 28 August	Wednesday 29 August	Thursday 30 August	Friday 31 August
10.00 – 12.00	Attend an ELICOS class	Attend an ELICOS class	Visit: KEMH (10 – 11.30) <i>Julie Rakich/Bev Thornlon</i> , main entrance, Bagot Rd <i>Bus depart Curtin 9.15am</i> <i>Bus depart KEMH 11.45am</i>	Visit: Fremantle Hospital (10.30 – 12.00) <i>Antoinette Thompson</i> , T Block, CC Bennett building, Education Centre <i>Bus depart Curtin 9.45am</i> <i>Bus depart Fremantle Hospital 12.15pm</i>	Free
12.00 - 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	Class: Aboriginal Culture <i>Gill 201.420</i>	Visit: Regent's Garden Aged Care Facility 1.30 – 2.30 <i>Bus depart Curtin 1.00</i> <i>Bus depart Regent's 2.40pm</i>	Free	Graduation lunch and awarding of Certificates of Completion (with Health Science Faculty staff and Curtin English) 1.00 – 2.30pm 211.230	Free

Week 3: PT/OT (Group B)

Time	Monday 27 August	Tuesday 28 August	Wednesday 29 August	Thursday 30 August	Friday 31 August
10.00 – 12.00	**SAA**	Visit: Royal Perth Rehabilitation Hospital, Shenton Park (9am-12pm) * meet at "old" hospital entrance (not the outpatient entrance off Selby Street, but in a little near the tennis courts) – if they have the same group leader as last time he will know to meet there. <i>(Justine Garbellini 0401 133 350 or physio reception is 9382 7307)</i>	Visit: Community – based Physio services Bentley Clinic PT & OT (9am-12pm) <i>Karen Richards</i> Meet Clinic reception, level 3, bldg. 404	Visit: The Niche (ILC) PT/OT <i>Stephanie Berghofer DT</i> 9.30 – 10.30 Assistive Equipment Service 10.30 – 11.30 Technology Service <i>Taxi depart Curtin 8.45am</i>	Free
12.00 - 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	**SAA**	Free	*Lecture: Rural & Remote Health PT/OT 408.2500 (2 – 4) <i>Robyn Fary</i>	**SAA**	Free

Week 3: Biomed (Group C)

Time	Monday 27 August	Tuesday 28 August	Wednesday 29 August	Thursday 30 August	Friday 31 August
10.00 – 12.00	**SAA**	Attend an ELICOS class	Visit: RPH pathology lab 9.30 - 12	Attend an ELICOS class	Free
12.00 - 1.00	LUNCH				
1.00 – 3.00	**SAA**	Free	Visit: Red Cross 1.30 – 3.00 Kirstie Lee Meet reception 290 Wellington St. <i>** please note, closed toed shoes are required to attend the Red Cross</i>	**SAA**	Free
					Saturday 1 Sept

*lecture with Koriyama university students
Buses and taxis depart from taxi stand 3, near bldg. 208
Arrive: 12/8/12 SQ233, 2.40pm / Depart: 1/9/12 SQ226, 3.55pm

Homestay drop at
Curtin 12.30pm
Bus depart for
airport 12.45pm
Flight departs
3.55pm



初日のキャンパスツアー

11. 学生アンケート(N=22)

A. 出発前の準備

(1) 費用の捻出

	N
家族が全額負担	12
自己資金のみ	4
自己資金と家族の支援	6

(2) 渡豪前の自己学習

	N
自己学習した	12
何もしなかった	10

(3) プログラムの発表時期

(4月の新入生・在校生オリエンテーション)

	N
適切	20
不適切	2

(4) 参加申し込み締め切り期限

	N
適切	22
不適切	0

(5) オリエンテーション時期・回数

	N
適切	18
不適切	4

(6) オリエンテーション内容

	N
適切	17
不適切	5

【事前学習した内容】

- 英会話
- 医療英語
- アボリジニ
- メディケア
- 豪州や日本の医療制度，保険制度
- パースについて

【事前学習が必要と感じた内容】

- 英会話
- 医療英語

【(3) のコメント】

- GW 終了後良かった

【(5) のコメント】

- 看護学生は他専攻の学生と同日にオリエンテーションが行えない
- 参加者に実習中の人がいる場合はその学生の日程を考慮してほしい
- 講義と日程が重なりすぎ

【(6) のコメント】

- 出発までに学生が行うべき内容を一覧表にしてほしい
- ホームステイフィーについての説明はメールではなく，オリエンテーション時にしてほしい
- 費用についてはもう少し早めに連絡をしてほしい
- いつまでに何が必要なのか，どういう準備をしなくてはならないか，という情報が少なく直前になって慌てる

【参加動機】

- 海外の医療に興味があった
- 海外の医療授業を受けたかった
- 海外の病院の見学ができるため
- 海外の文化を知りたかった
- ホームステイに興味があった
- オーストラリアに行ってみたかった
- 自分の視野を広げたかった
- 自分を試してみたかった
- 本場の英語に触れたかった
- 教員・友人の勧め
- 実習前のストレス発散
- オーストラリア西海岸に行く機会が今後ほとんどないと考えたから

B. ホームステイについて

(1) よかったこと

<英語力が向上した>

- 英語を理解すること、英語で伝えることを一生懸命取り組めた
- 積極的に英語を話すことができるようになった
- 英語を話すことに抵抗がなくなった
- スピーキングだけでなく、ヒアリングの面が特に大きく成長した

<豪州の異文化を体験できた>

- オーストラリアの生活の様子を知ることができた
- 本では見ることができないもの多くを見たこと
- 現地の家に行って共に暮らすことで日本との違いを、身を持って体験出来た

<人間関係が広がった>

- 様々な人と関わり、つながりが増えた
- ホストファミリーが温かく迎えてくれるのでとても安心できた
- 他のパースの大学に通う人とも交流できた

<自分が前向きに成長できた>

- お互いに気持ちや言いたいことを理解しようとする事の大切さを知った
- 英語をもっと勉強したいと考えるようになった
- 積極的に自らいろいろ行動できるようになった

(2) 困ったこと

<コミュニケーションの難しさ>

- 日が経つにつれ一日の中で話す英語が定まってきてしまい生活が単調になってきたこと
- 伝えたかったことがなかなか伝わらなかった
- ホストファミリーとの連絡手段

<生活の違い>

- 自分の部屋に勉強机がなかったこと
- 土日にバスがあまり運行していなかった

た

- 夜間はバスの本数が激減するので、料金が非常に高いタクシーを何度も利用せざるを得なかった
- 家族が家で靴を履いていたりいなかったりする日があり、自分がどうしていたらいいのか困った
- 食べ物の量が多い
- 日曜日の移動方法がない

<ホストファミリーの内情>

- ホストマザーが風邪をひいて寝込んでしまったため、話す機会がなく困った
- 土日の観光等になると朝早くに大学に集合しなければならず、ホームステイのマザーに食事の面で迷惑をかけることになった
- 近くのスーパーマーケット等、普段生活するうえで行くようなところに行かせてもらえなかったこと
- ホームステイ先の子供達に英語で注意しているのに、彼らにぶたれて少し怪我したこと
- 小さい子供が私の部屋に入ってきて、物を取ったりしたこと
- 寝に行くときなど、自分の部屋に戻るタイミングに困った
- ホームステイマザーの部屋を教えてもらわなかったため、夜間緊急でマザーの所へ行きたかったが行けなかった
- 洗濯物がなくなってしまう
- ホームステイの家族が子供たちを制圧できていない

<その他>

- 費用が予想よりかかる

<要望他>

- 支払っている金額に見合ったサービスが欲しい
- もっと長期間滞在したいと思った
- 自分以外に留学生がいる場合は、予め伝えておいてほしい
- 参加者の中で通学時間の差がありすぎる

- 治安が良い場所をホームステイ先にしてほしい
- ホームステイ先に同じ国の人がいると日本語で話してしまい英語の勉強にならないので、できれば他の国の方がよかった
- 学校に近いところに滞在したい
- 大学までの交通費にばらつきがあり、使用するお金に差が出てくるので、その点考慮してほしい
- コミュニケーションが豊富な環境だといいです

C. 研修コースについて

(1) 印象に残った見学先

① Fremantle Hospital (4名)

- 救急をはじめ、興味ある病棟を見学できた
- 精神科があった

② Kings Edward Hospital (8名)

- 助産師や看護師の人と話をすることができた
- 分娩室や病室に関して丁寧に説明してくださった
- 水中出産をする部屋があった
- 産後のカンガルーケアを当たり前のように行う習慣があった
- 男性の助産関係者の方と会うことができた

③ Royal Perth Hospital (4名)

- 機械化も進んでおり、見たことのない機械もたくさんあった
- ほぼ全ての検査部を見学できた
- 色々な部門があり、オーストラリアの医療の大体の全体像を掴むことができた

④ PT Clinic (3名)

- 実習生がほぼ一人前に患者に対応している姿を見たから
- 4年生が実習で診察・治療しているのが衝撃的だった

⑤ Shenton park Hospital (1名)

- 多くの施設を見学させてもらった

(2) よかったこと

<海外の医療について学習できた>

- 施設内の見学だけではあったが、どんな雰囲気なのか、病室の様子など実際に感じ、見ることができた
- 施設見学は日本の施設と比べながら学習できるので勉強になった
- オーストラリアの地理ならではの医療を学ぶことができた
- 実際の病院を見ることで医療を身近で感じる事が出来ました
- 現地の学生の様子を間近で見ることができた
- 理学療法についていろいろと学べた

<異文化体験>

- 休日を使ってオーストラリアのいろいろな場所に行き、観光も存分に楽しめた
- 様々な国の人や考えの人と接し意見交換を行うことができた
- 他国の方たちの価値観なども知ることができた

<英語力の成長>

- 英語にたくさん触れることができた
- ちゃんとした英語ではなくても伝えることができるようになった

<自分の変化>

- 英語や外国の人に対して抵抗がなくなった
- 積極的になれた

(3) 困ったこと

<英語力の乏しさ>

授業がキャンセルになったことを伝えられず困った

- 自分の要求がうまく伝えられない
- 現地の学生と一緒に授業を受けさせてもらう機会があったが、英語を話すスピードが速かったり専門用語ばかりで理解することができなかった

<講義について>

- カーティン大学で行っている講義に参加させてもらったが、内容や英語が難しく、なかなか理解ができなかった
- 専門科目では説明が早すぎて理解できなかった

<その他>

- 交通費が高く、また土日の電車やバスが少なかった
- バスの仕組みや運行状況がよく分からなかった
- 外出中での友達との連絡手段がなかった。公衆電話が少なく、海外対応の携帯を持ってないと何かあった時に誰にも連絡がつかないなと感じた

(4) 要望他

- 看護について学びたかった
- 看護について学べるような演習や学習機会を設けてほしい
- 看護系の授業を受ける機会がかなり少なかったのもっと受けたかった
- 「看護」を追究したオーストラリアならではの授業を受講することができなかったこと
- オーストラリアで行われているケアなどについて実践的に学べると良かった
- もう少し医療について学びたかった
- もう少し現地の学生と触れ合う機会が欲しかった
- もっと長期で滞在してもいいと感じた
- もっと専門科目の授業を見たかった
- どの専攻も同じくらい多くの授業・施設見学の機会があればよかった
- 日本語を勉強している学生との交流をしたかった
- 作業療法の施設見学があまり多くはなかった

D. 研修が与えた影響（自由記載）

<学ぶことへの意識の変化>

- 英語の重要性を感じるようになった
- 英語をもっと話せるようになりたいと

強く思った

- 海外への興味がさらに増した
- これからの学習をまじめに頑張りたいと思いました
- 上を目指していけるような気がします
- 勉学に励むのみです

<専門分野や医療への学習意欲の向上>

- レポートを書く際、英語の論文に当たることがあるが、半分くらいは読める自信につながった
- 日本の医療を勉強しているだけでは気づくことができなかった外国の医療について学ぶことで知ることができた
- 他の国での医療についても興味を持つようになった
- 専門的により深い勉強を続けていけたらいいと思います
- 現状を仕方ないと思うだけでなく、いろいろな方向から物事を見ることができるようになり、考え方が広がった
- 少しだが、国際的に考えることができるようになった
- 海外の医療に関心を持っていけたらと思った

<視野の広がりや将来展望>

- 留学したいという思いが強くなった
- 進路としては、臨床にしか興味がなかったが、研究にも少し興味を持つことができ、進路の視野を広げることができた
- 医療と英語を自分の中で結び付けて進路を考えていきたい
- 海外で働くという選択肢が増えたとともにその意欲も膨らんだ
- 就職した後どのように自分が変化できるか考える機会になった

<人間としての成長>

- カーティン大学で学ぶ学生の熱心さを見て、私も頑張らなければと思えた
- 積極的であることがいかに大切か分かった
- オーストラリア人の楽観的でアバウトな性格は神経質な私には最初とまどい

があったが、そのくらいの方がかえって勉強などしやすい時がある事が分かった

- 自分の意見をどんどん言えるようになっていたいと思った
- 自ら行動することの大切さを実感した。度胸がついたように思う
- 積極的に自分の声を発するということが人とかかわる上で大切だと思った

- 今回の、経験を糧に困難なことに立ち向かえらると思う
- あらゆる場面において積極的に行動していくことの大切さを身に着けることができた
- 他人を理解するための知識の幅が広がった

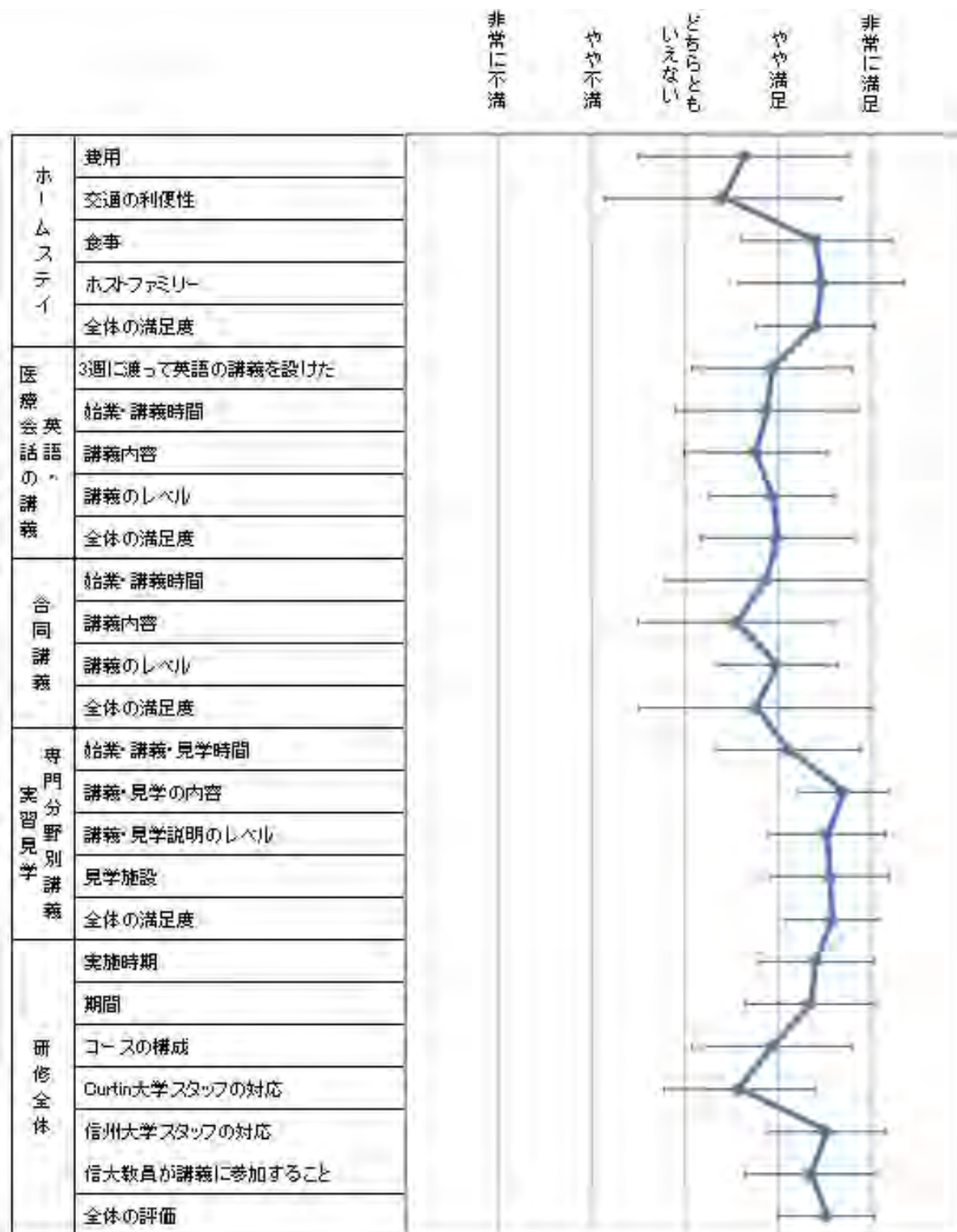
研修施設、カーティン大学ベントレーキャンパス

(下図. カーティンマップ →, 上から順)

- Physiotherapy (408)
- Nursing and Midwifery (405)
- Occupational Therapy (401)
- Biomedical Sciences (308)
- Student Central (101)
- Roobertson Library (105)
- CELC and Media Studies(208)



E. 研修に対する満足度



(Mean ± SME)

- コースの内容的なことに関しては、費用や交通の利便性などで比較的点数が低くなっている。
- 英語の講義以外で、合同授業の点数の低さは、授業内容が概論的なこと、各専攻専門授業に比べて英単語に親しみが少ないため、内用が理解しにくかった面があるためと思われる。
- 専門分野別授業についてはおよそ良好な評価であり、特に施設見学に関する満足度が高かった。
- カーティン大学スタッフの対応への満足度の低さは、おそらくプログラムの変更が頻繁にあったことや担当講師が本学学生の授業参加を把握していなかったケースがあったことなど関連しており、改善に努める必要がある。

12. 学生レポート

1) Curtin 大学夏プログラム学習成果レポート

看護学専攻 2年 小山 星花

Curtin 大学短期留学プログラムでの約1か月は、1日1日が密度の濃い、とても充実したものでした。現地で見聞き、体験したことは英語や看護の面のみならず、私を「人」としても大きく成長させてくれたのではないかと、日本に帰国した今思います。もともと「英語」というものに興味・関心があり、その分野の能力を伸ばすことを目標に今回の留学に望みましたが、オーストラリアの文化や認識の違いは逆に、日本の社会や常識を見直し考えなおす良いきっかけになりました。

オーストラリア、特に私たちの訪れたパースでは水や電気がとても貴重な資源として捉えられています。そのため「シャワー使用時間は5分」、「洗濯は週に1回」など、ホームステイ先での規制も厳しく、時にはそうした習慣の認識の違いに戸惑いを感じることもありました。しかしその度、同じく日本から共に来た友達同士で不満をぶつけあったり、またそうした中で日本では何気なく使用している資源がいかに大切なものであるかを実感することができました。1人ではなく多くの友達と異国の土地で情報を共有し、アクションを起こしていけるのもこのプログラムの強みだと思います。

ここからは私が過ごした3週間を、少し説明を加えながら紹介したいと思います。信州大学から成田空港までバスで移動した後シンガポール空港を経由し、オーストラリアのパースに到着するのに丸2日かかりました。飛行機を途中で乗り換えなければならぬということもあり睡眠のリズムを完全に失ったほか、シンガポールからオーストラリア行のルートでスーツケースが行方不明になるなど(後日無事ホームステイ先に届きました)、留学初めの数日は旅行ならではのトラブルに慌てふためいたのを覚えています。各飛行機の中では次の便へ向けて十分な休息をとること、また事前学習として為替、円とドルの取引について学習しておくことをお勧めします。空港でやることの一つとして換金(円からドルへ、ドルから円へ)があります。今現在どこで換金するのが自分にとって得か。また円高・円安になっているその政治的・経済的な背景は何か。留学のみならず、そうした日頃からの自問自答も大切な事前勉強のうちの一つだと思います。さて、

オーストラリアに到着しました。オーストラリアの第一印象はとにかく「大きい」、ただその一言に限ります。土地の使い方が贅沢だなと感じたことに加え歩行者、自転車、障害者などが満足かつ快適に過ごせる、バリアフリーな設備や文字・絵のわかりやすい標識が至る所にみられました。

カーティン大学へ向かうバスに乗り、約3週間お世話になるホームステイファミリーと対面した後は、ホームステイ先へと向かいました。ホームステイファミリーは温かく私を迎え入れてくれたことに加え、多くの留学生を迎え入れている経験からも、私が困ったときには即座に対応してくれました。オーストラリアに到着した次の日から早速カーティン大学で様々なこと(大きく分けてオーストラリアの地理や文化、英語、医療)を学びました。ELICOS という英語の授業は私が最も大学にて楽しみしていた授業の一つです。中国や韓国、サウジアラビアなどから来た他の留学生と共に英語を学び、英会話を通して交流を深めるのが主な内容です。他の留学生はとても熱心に、能動的・積極的な態度で授業に取り組んでいました。わからないところが出たら恥ずかしがらずに何度でも質問する姿勢が印象的で、心打たれました。留学生のみならず、カーティン大学で出会った学生のほとんどがしっかりと自分の意見を持ち、積極的に発言・反論をしていたのを覚えています。通学にバスを利用しましたがバスの中は日本と異なり携帯電話の使用が認められています。またバスや電車、フェリーといった交通手段をカード一枚で利用できるシステムが投入されていました。こうした互いの文化・認識の違いも留学早々の良い刺激になりました。

留学期間中はカーティン大学内の授業のみならず、先生方の企画して下さった病院見学や老人ホームなど大学の外の施設見学、また休日を利用した様々な観光地巡りなどもしました。KEMH(King Edward Memorial Hospital)という老人ホームやFreemantle Hospital という市内の病院と、現地の医療福祉施設を実際に見て回ることによって日本の医療福祉施設との共通点や相違点を少しでも見出すことができたのではないかと思います。日本とオーストラリアそれぞれの治療・ケアの仕方に違いはあれ、国を超え「看護」の土台にある基本的ルールや考え方が似通っていることを確認することができ、自分にとってとても貴重で有意義な時間でした。保健学

科ならではそういった施設見学に加え、そのほかにもチョコレート工場、動物園、ワイナリー、ピナクルズなどパースならではの観光地に訪れたりもしました。Didgeridoo(原住民が使用していた長い筒状の木管楽器)専門店へ行き、アボリジニーという原住民の生活ぶりやオーストラリアの歴史を学びました。休日には保健学科の人たち全員でキングスパークというところでバーベキューをしたり、フリーマントルという市街地に買い物をしたり、刑務所トンネルツアーをしたり、友達の家泊まりあうなど、とても密度の濃い充実した日々を過ごしました。オーストラリアでの詳細(ホームステイ先の様子、観光地の様子など、大学のその他の授業の様子、病院先で見聞きたこと)はレポート3枚にまとめられるものではありません。詳しくはオーストラリアの地に足を運んだ際、自分の目で確認してみてください。

今まで留学中の出来事をつらつらと書いてみましたが、留学を充実かつ満足のいくものにするためにも事前準備は必須です。保険や同意書などを留学直前になり求められるかと思いますが、保険会社はいざという時にどのくらいの額を保障してくれるのか、自分が同意した内容は何で、それによる自己負担はどのくらいかといった内容を予め押さえておくのと良いと思います。また物的準備は万全だったものの上記のような内容やオーストラリア現地についての地理や気候についてなど、もう少し「事前学習」や「知識の準備・整理」をきちんとしておけばよかったと今になり思います。

またこれは私的な意見ですが、留学先では日本人同士での度の過ぎた買い物や観光地巡りはあまりお勧めしません。観光地巡りもあらかじめ企画されたものかそれより少し多い個所で十分です。もちろん現地の文化や気候、また留学に刺激を加える面においては観光地を巡ることも大切ですが、このプログラムの目的はあくまでも「留学」であり「観光」ではありません。そこで使われる言語も現地の言葉(英語)ではなく、日本語が多くなります。そういった意味合いからも私自身過度な買い物や観光地巡りはせず、積極的に現地の人々に言葉を投げかけるよう努めました。現地の人々、特に医療関係者の方と交流できるせつかくの機会を有効に使うことをお勧めします。

このプログラムを通し、「失敗を恐れずに自ら進

んで行動することの大切さ」を学ぶことができました。能動的・積極的な姿勢は看護技術を身に着ける時のみならず、あらゆる場面において必要です。また上記にあげた様々な反省を生かしつつ、看護や英語その他自分の興味ある分野を、自分の可能性を上げる意味でも、一層広げられたらと思います。

最後になりましたが、このプログラムを企画し準備してくださった方々、ホームステイ先のご家族、私たちを引率してくださった先生方、その他多くの関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



看護・助産学科校舎の玄関

2) Curtin 大学プログラム学習成果レポート

検査技術科学専攻 3年 染谷 美帆

たった3週間のオーストラリアでの生活は私にとってどれも真新しく新鮮で、刺激的であり、実に充実したものとなりました。まず、私がこのカーティンプログラムに参加した理由は、学生という時間に余裕のあるうちに一度海外での生活を経験してみたいという漠然とした理由からでした。しかし、英語の研修だけでなく、今私たちが学んでいる医療のことについて日本と比較して学ぶ機会があればよいと思っていました。そこで、カーティンプログラムは英語研修と現地での病院見学など医療システムを学ぶ機会も設けられているので、参加することを決めました。

第1週目、不安、緊張そして期待に胸を膨らませて降り立ったパースの地。ここで3週間の生活が始まり、様々な人との出会いを想像するとわくわくして身震いが起きたことを覚えています。この時の私は3週間という期間は長いと思っていました。そして、ホストマザーと出会いました。彼女は笑顔で私を迎えてくれ、その笑顔が私の不安を取り除いてく

れました。しかし、緊張は続き、最初に話そうと準備しておいたことは頭から消え、初日は上手くコミュニケーションを取ることができませんでした。今振り返ると、Yesなどの簡単な単語をいうことで精一杯で、全く文章になっていなかったと思います。それでもホストマザーは私が話そうとすることを一生懸命に聞きとって理解してくれました。自分の英語力のなさに愕然としたのと同時にホストマザーの温かさがとてもうれしかったことをよく覚えています。カーティンでの英会話の授業は先生たちのパワフルさに圧倒されながらもとても楽しく受けることができました。また、オーストラリアの医療システムについてももちろん英語での授業でしたが、先生が丁寧に英語を話してくれるためよりよく理解することができました。オーストラリアという1つの大陸からなる国が抱える医療の問題は、やはり小さな島国である日本のそれとは異なっていました。広大で内陸部に砂漠の存在するオーストラリアではRFDSとよばれるドクターヘリがこのような医療施設の整っていない内陸部などで活躍していることを知りました。

第1週目も終わるころになると次第に慣れてきてシティの方へ買い物に行くことも多くなりました。それに伴い、大学外に出ることで気づき、そこから学ぶこともまた多くありました。多民族国家であるオーストラリアでは白人はもちろん、アラビア系の人やアジア系の人など多くの民族が暮らしていることが分かりました。従って、私たち日本人も外国人としての意識なく、一オーストラリアの住民として自然にふるまうことができたと思います。このことはオーストラリアでホームステイをするとても良い面だと思っています。このことに気づいてから大学内の生徒の様子を見てみても、彼らはお互いを尊重し合っており、様々な民族的背景があるということを認め合っているようだと感じました。だからこそ勉強なども切磋琢磨し合えるのかなとも思いました。また、彼らは笑顔で話しかけてくれたり、挨拶をしてくれたりしますし、バスでは年配の方がいると、席を譲るのはもちろん、乗車下車の際にすかさず手伝うなどオーストラリアの人々のフレンドリーさや優しさも日常で感じてくることができました。このオーストラリア人の性格も私たちがホームステイをしやすい理由ではないかと思っています。

第2週目は専門の授業に参加することができました。1個下の学年である2年生の検査学生の病理学、血液学、免疫学の授業に参加しました。英語でしたが、私たちは日本ですでに学んであった範囲であったので、なんとなくですが理解することができました。しかしながら忘れていくことが多く、周りの生徒達の知識の多さに自分はとても未熟だと反省することもありました。生徒達は授業に積極的に参加しており、日本の学生はこの姿勢を学ぶべきであると心から感じました。このように授業に参加すればただ講義を聞いているだけよりも記憶に残りやすいと思いました。病理や血液の授業では私たちに一人ずつ生徒がついてくれ、また免疫の授業では実習の各グループに入れられて一緒に実習を行うことができました。自分と同じ臨床検査技師をめざす生徒達と一緒に勉強し、話したことは自分の専門への勉強意識の向上につながり、とても良い刺激となりました。

第3週目ではロイヤルパース病院、赤十字に見学に行くことができました。病院ではほぼ全ての検査部を見学させてもらい、各検査室で働くスタッフの仕事に対する責任感や熱意を肌で感じてきました。各検査室で受けた説明は英語を話すスピードがとても速く、英語を理解するので精一杯でした。それでも病院の様子、日本との違いなどを興味深く見学して行くことができました。特に、私は輸血部の見学が興味深かったため、非常に印象に残っています。輸血上重要になってくる血液型であるRh血液型のうちD陰性者の割合がどれくらいなのか疑問に思い、質問して行くことができました。日本では陰性者の割合は0.5%ですが、白人の多いオーストラリアでは15%の割合で陰性者が存在しているとのことでした。従って、輸血に際して日本以上にRh血液型が重要であるということが分かりました。見学したのは全て検査部であったため、患者さんと応対している様子を見て行くことができなかったのは残念な部分です。赤十字の見学では献血の様子から、その血液の処理の方法など赤十字の裏側まで見せていただくことができました。日本でもここまで見たことはなかったためとても興味深かったです。

週末には友人とパースの観光に行けたのもこのプログラムの思い出の一つです。ロットネス島に行き、みんなで島一周サイクリングした経験は本当に良い思い出です。雲ひとつない空と島を囲む海の広

大きさや透き通る青に目を奪われ、サイクリング中何度も自転車から降りてその自然の美しさを目に焼き付けてきました。オーストラリア特有の動物であるコアラやカンガルーと触れ合う機会もありました。またピナクルズに行き、砂漠の上を友人と寝そべったのも良い思い出となっています。大地の大きさ、空の広さを体全体で感じてくることができました。どれも日本ではなかなか体験することのできない大自然でした。シティやマーケットでの買い物では現地の人々と触れ合う良い機会でした。

最初は長いと思っていた3週間という期間も、プログラムの終わりに近づくにつれて本当にあっという間だと思うようになり、まだ帰りたくない、ホストマザーともっと話したいと感じるようになっていました。こう感じるようになったのは、一日一日が濃く、充実しており楽しく過ごせたからだと思います。この地で学んだことは小さなことから大きなことまで数え切れないほどたくさんあります。自分に足りないと感じていた積極性も自然に身に付いたと思います。なぜなら、積極的になければこのプログラムを楽しむことができなかつたからです。また、英語の力も少しは向上したと思います。周りが全て英語ですから、特にヒアリングの力は上がったと思います。プログラムの終わるころにはホストマザーと楽しく会話できるようになりました。第1週目のたどたどしさはうそのようでした。

海外で生活し、専門の研修を行った今回の経験は、今後チャレンジすることや、壁にぶつかった時などで自信につながると確信しています。海外で生活したことで視野が広がり、いろいろなものの見方、考え方ができるようになったと思います。これは自分の財産であり、絶対に忘れることはありません。今回のプログラムに参加した友人、出会った現地の人々、支えてくれた先生方、その他関係している全ての人々に感謝します。ありがとうございました。



実習風景

3) Curtin 大学プログラム学習成果レポート

理学療法学専攻 3年 小林 雄太

今回、短期留学を経験したことは、私にとって一生忘れることのない、とても大きな経験だったと思います。初日にみた初めてのオーストラリアの風景は草木や家、空までもが日本とは違い、目に焼き付いています。このオーストラリアで経験できたことをいくつか報告します。

1つ目に、カーティン大学でのことです。カーティン大学は一目見てその大きさに驚かされました。一つ一つの学部の校舎がとても大きく、端から端まで行くのに、15分ほど必要でした。このため、移動は大変でしたが、勉強は広いスペースで勉強することができ、勉強する環境としてはとても良かったと思います。また、理学療法の校舎もとても大きく、勉強のための道具もたくさん揃っていました。まず、ベッドの量がとても多く、一人一人が運動療法の勉強をするのに十分なスペースがしっかりと確保されていました。また、研究をするための建物があり、運動の分析をするためのカメラや床反力計を備え、スペースもしっかりとあって、研究がしやすそうに思いました。さらに、解剖の授業を受けたのですが、その授業では本物の脳のあらゆる面が標本でそろっていて、実際の脳で勉強できることがとても良かったと思います。信州大学も解剖の実習はありますが、座学でも本物を見られたら、もっと臨床に近い勉強ができると思いました。次に図書館を見てそこでも驚かされました。6階建てでとても膨大な量の本があり、さらに生徒の勉強するスペースもたくさんありました。また、理学療法の本の量も膨大で、日本では見たことがないような文献もたくさんありました。やはり、理学療法の勉強をしていく上でえいごをよめることは必要なことだと思いました。

2つ目にオーストラリアの理学療法に触れられたことです。そこで感じたのが日本とオーストラリアとの理学療法士のレベルの差です。何回かカーティンの授業や実習に参加させていただいて、学生のレベルの高さに驚かされました。授業では、日本の理学療法士がやってはいけない診断の授業を見させていただきましたが、日本で学ぶような検査よりもずっと細かい検査の練習を生徒同士で繰り返し、多くの質問に2人の先生が答えていました。診断ができると、その分知識が深まり、治療にも役立つと思いました。また、他の授業でも感じたことですが生

徒は分からないことがあるとその場で質問する光景が多くみられ、日本との積極性の違いを感じました。また、実習では1人1人の実習生が個室に入り、理学療法士と同じように個々の患者さんをみていました。この臨床とほぼ同じようにすることで、臨床に行ってもすぐに対応できる能力が身につくのかと思いました。また、この実習ができるのは診断までの勉強をやっているからだとも思いました。やはり、診断を細かくすることで、その患者さんのどこがどのように悪いのかを確認し、そのことがすぐに治療につなげられるのだと思いました。次に開業権をもった理学療法士の開業施設を見学させていただきました。そこには、水治療法のためのプールや、運動療法のためのあらゆる器具が何種類も並んでいました。これほどの種類があれば、あらゆるケースに対応して運動療法がおこなわれて、とてもいいと思いました。日本の病院とは違いこれほどの種類が揃えられるのは、ビジネスとして経営している成果だそうです。開業は大変だと思うけど、意思を通して理学療法を受けると言った2段階にならなくてもいいし、気軽に通えると言った点でも、早期治療や予防につながると思いました。また、日本と大きく違ったのは理学療法士の診断室があったことです。そこにはテストをしやすいようにベッドがあり、治療のための診断をするということでした。実際に診断ができるところを見て、改めて日本との違いを感じました。

3つ目はホームステイをすることで、海外の人とのコミュニケーションや文化の違いを学べたということです。私のホームステイでは1周目はホームステイの女性と2人、2週目はアメリカから来た男性と3人、3週目は日本からもう1人来て、4人で暮らしていました。

初日はいきなりハプニングがあり、空港の手違いで荷物が届かないことがあり、戸惑いましたが、買い物や洗濯してもらえたので、とても助かりました。また、1周目はホームステイの方と2人で過ごすということで、食事の準備中や暇な時間など、できるだけ話していました。その時、私は英語で会話したことがほとんどなく、理解できないことや説明できないことが多々ありました。しかし、ホームステイのお母さんはとても優しく、ゆっくりと何回も単語を簡単に説明して下さって、何とか理解して会話することができました。最初はとても緊張して

いましたが、気楽に会話できるようになったのはホームステイのお母さんがこのようにいろいろと配慮してくださった結果だと思います。

到着して1週間は文化の違いに戸惑うことが多く、大変でした。まず、水がとても貴重だと言うことです。シャワーは1日5分、洗濯は1週間に1回と決まっています、日本のように水がどんどん使えることはとてもありがたいことがわかりました。次にバスの違いです。オーストラリアのバスは停留所が多いのですが、バス停を通る時にアナウンスはしてもらえないので、自分で場所を覚えなければいけません。しかし、オーストラリアの道路はどこも同じに見えてしまい、下りる場所が分からないことが多く、1つ後ろのバス停で降りてしまうことなどがあり、苦労しました。1日目はお母さんに迎えに来ていただくことになり、お世話になりました。また、日曜日にいつも乗っていたバスが使えなくなってしまうのも驚きでした。そのため、日曜日はホームステイのお母さんに送っていただかないといけなく、またお世話になってしまいました。

2週目はアメリカのホームステイの男性が来ました。この時から会話がとても大変になりました。この男性とホームステイのお母さんが話す速度がとても速いため、最初は全然理解できず、会話に全く入られませんでした。しかし、私に話しかけるときは遅いスピードで話してくださり、さびしくなることはありませんでした。また、このスピードの会話が2、3日続くとだんだん慣れてきて、夕食の場でも何度か会話にはいられるようになっていきました。最初、このホームステイの男性が来た時は、少し怖く、会話に入れずいやな気がしました。しかし、今では英語圏の自然な会話を目の前で聞けたうえに少しずつ理解できるようになり、一緒にホームステイでよかったと思いました。

3週目には日本の学生がもう一人来て、4人になりました。そのころにはアメリカの男性とも話せるようになってきて実家の話や、アメリカのことを話せたことは新鮮で、私にとってとてもいい思い出です。また、日本人が2人になったために、日本語禁止令が言い渡されました。日本人同士でへたな英語を使うと、いわゆる日本語英語のようになって、変な感じがしましたが、どうしても日本人同士だと日本語で話してしまうので、日本語禁止令はとても良かったと思います。また、だんだんと仲良くなれ

たので、最後でみんなでお酒を飲みました。ビールはどの国でも場を盛り上げてくれるすばらしい道具で、よりいっそ仲よくなることができました。こういった共通の楽しみがあることはいいことだと思います。

3週間のホームステイは、最初は長いと感じていましたが終わってみるととても短かったです。やっと自然な英語が理解できるようになってきて、会話することがとても楽しく、お互いの国のことが分かってきたときに帰らなければいけなくなってしまい、とても残念でした。また、この状態で日本に帰ってしまったら、また、英語が聞き取ることができなかったころに戻ってしまうと考えると、もう1カ月はホームステイをしていたかっと思えました。またお金がたまって海外に行けるようになったら、ぜひもう一度行きたいと思います。



ロットネスト島でのサイクリング

4) Curtin 大学プログラム学習成果レポート

作業療法学専攻 2年 黒田 早紀

三週間という短い期間はあっという間に過ぎてきましたが、私はこのカーティン大学への短期留学で、日本では経験できなかったことをたくさん体験し、とても充実した日々を過ごすことが出来ました。大学で作業療法と理学療法の講義に参加し、他の学生と一緒に勉強をしたり、大学内のクリニックやパースの町のリハビリセンター、開業した理学療法士の施設、作業療法士の施設を見学したりしたことで日本との共通な部分、違う部分を実際に見ることができました。そして、英語のクラスやホームステイでは、日本とは別の文化を感じながら生活することができました。

私がこのカーティン大学への短期留学に参加しようと思ったのは、海外へ行くことで、自分の視野を

広げようと思ったからです。オーストラリアの医療制度などは発達していると聞いていたため、日本と違うどのような制度があるのか、どう違うのかなどを実際に見て知りたいと思いました。また、私はアメリカ合衆国出身で、17年間そこで暮らしていました。17年間住んでいて、病気にかかったりけがをしたりすることはよくありました。日本人医師のいるクリニックに通うことがほとんどでしたが、たまに現地の人による医療を受けることもありました。このような大きな医療施設に通うこともありましたが、現地の高校に通っていた時は、部活中に足首を捻挫して、校内のアスレチックトレーナーという職業の人々に治療をしてもらったり運動療法・物理療法をしてもらったりしたこともあります。そして、そのアスレチックトレーナーに勧められて、地域の理学療法の施設に通い、リハビリテーションを行ったこともあります。このような多くの経験から、日本とオーストラリアだけではなく、更にアメリカ合衆国との相違や共通を知りたいと思ったため、このカーティン大学への短期留学に参加しようと思いました。三週間の短い期間ではありましたが、相違と共通について私が学べたことを書いていきたいと思います。

私は作業療法学専攻ですが、短期留学中は頻繁に理学療法学専攻の学生と一緒に行動しました。そのおかげで、詳しくは互いの専攻のことを知らなかった私たちでしたが、お互いの専攻の講義を受けて知見が広がったと思います。そしてもちろん自分たちの専攻についても日本との違いなどを学ぶことができました。まず、私の専攻の専門科目の講義で一番興味を引いたのは Ergonomic、人間工学の講義です。作業療法は人が行うすべての作業(仕事、趣味など)に関わって治療を行うことは知っていましたが、今まで私は日本での講義ではオーストラリアで行った講義とは違う形式の講義を受けていました。日本で私が実際にやったことがあるのは、主に運動療法を行っている患者や検査を行っている患者の映像から、どのような問題がある、身体機能などでどのような利点がある、ということの評価し、グループになって確認しあう、という形式の講義をしたことはあります。留学中に参加した人間工学の講義で扱ったのは5つの症例で、コンピュータ・iPad・ノートパソコンなどの電子機器を頻繁に使用している人々で起こった問題などについてでした。症例、

問題などの書かれた紙と共にコンピュータなどの実物が用意されており、グループに分かれた学生は実際に症例を自分たちで再現しながらどこが問題でどう改善すべきかについて話し合っていました。教師も一つ一つのグループの話し合いに参加し、問題改善のヒントを与えたり、学生の気が付かなかった問題点を挙げたりしてさらに話し合いを盛り上げていました。その学生同士の話し合い、先生との学生との会話・質疑応答はみんなとても積極的で、講義に参加した、私を含めた日本人の学生たちはやや圧倒されてしまいました。そんな私たちでしたが、現地の学生はやはり積極的に私たちを討論の輪の中に入れてようと症例や問題・改善策について易しく解説をしてくれました。そのような様子を講義に参加することで実際に感じ、私はオーストラリアの学生・教師はコミュニケーションをとることがとても上手いと思いました。人と関わる作業療法士・理学療法士になろうとしている私たちには、患者との信頼関係づくりなどの為にコミュニケーション能力はとても重要なスキルです。講義内容も日本ではやらなかったことだったため面白く、勉強になりましたが、学生と教師の間の積極的な話し合いの雰囲気はとても参考になりました。

次に印象的だったことは、理学療法の施設・作業療法の施設の見学に行ったことです。まず理学療法の施設はカーティン大学内にあるリハビリテーションセンターを見学しました。カーティン大学の中には保健室のような治療を病気・けがをした人々が治療を受けられる施設、悩みがある人々が相談しにくるカウンセリングの施設、そして運動療法などのリハビリテーションを受けられる施設など医療関係の施設が多くありました。リハビリテーションセンターはただ医師や理学療法士がいて運動療法などを提供するわけではありません。そこでは理学療法学専攻の学生たちが実習として働いているのです。見学に行った時も4年生で卒業間近の学生たちが実習をしていました。学生は朝から予約の入っている数人の患者を担当して治療をしました。学生の横に先生は付きません。一人で患者に接し、わからないことがあったときだけ「ちょっと先生に聞いてきます」と言って治療部屋を出て先生に質問しに行きます。その姿は堂々とした一人の理学療法士そのまま、「学生」「実習中」という雰囲気はまったくありませんでした。私はまだ実習で実際に患者

を評価したり治療したりしたことはありませんが、一緒に見学をした3年生の理学療法学専攻の先輩方の実習の様子を聞くとやはり日本とオーストラリアは違うことがわかりました。先輩方の話では日本で実習をするときは一人の学生につき一人の理学療法士や先生が横にずっとついて、治療法も「こういう症状の患者にはこの治療」と、ある程度決まってきたりしています。先輩方は2年生で作業療法学専攻の私よりもじっくり、真剣に見学しており、私も負けたくないと思って一生懸命話を聞いたり運動療法中の患者の様子を観察したりしました。オーストラリアの学生の技術と知識がとても豊富で、私たちももっと勉強をしなければと思い知らされましたが、それ以上に彼らは実習生ではなくひとりの理学療法士として責任を持って実習に臨んでいて、その姿に元気とやる気をもらいました。私も実習に臨むときは堂々と責任を持って、実習生よりは作業療法士として患者と接していきたいと思いました。

作業療法の施設は、自宅復帰をした人々のための自宅・仕事場・学校などの環境改善に用いられる、車椅子や台所用品、入浴用品など多くの道具を紹介する施設でした。また、言語療法士と協力しあってコミュニケーションをとるための自助具も紹介していました。車椅子などの道具を実際に体験しながら施設や道具について説明してもらって、私はこのような道具は日本でリハビリテーションセンターや老人ホームなどの見学実習に行ったときに見たことがある、と思いました。もちろん、日本にはあまりなさそうな道具もありました。例えば台所の棚を物がとりやすいように上下移動させる、冷蔵庫のドアを開けやすいように上下移動させるなどの操作をするためにiPadをリモコンにして使う、ということは現在の日本ではなかなか見られないと思います。しかし、iPadは日本でもどんどん普及しており、上下移動する家具もあります。需要が高まればどんどん日本でも見られるようになるだろうと思いつつ施設を見学しました。人がどう道具を使いやすくするか、生活を便利にするか、道具がとても似通っているのも日本・オーストラリアなど関係なく世界で協力して自助具をデザインすることができるのではないか、と思いました。

この短期留学で作業療法学専攻の私と理学療法学専攻の学生は本当にたくさんの講義と施設見学

で現地の学生と患者と触れ合うことができました。日本にははきっと学べなかったことを学ぶことができました。私はこの留学でさらに世界の作業療法と理学療法に興味を持ちました。今度は知らないことが多すぎる学生ではなく、自立した作業療法士として別の国へ訪れて日本・オーストラリア・アメ

リカ合衆国とはまた違う、または共通なところを学び、そのような経験を積んで自分にしかできないことは何か考え、実行したいと思いました。そのためにもまず、日本でしっかり作業療法士になるために勉強して自分を磨きたいです。



いざ、カーティン大学へ →



まずは成田空港へ行き、飛行機に
← 乗ります



やっとパースに着いた！と思ったら、荷物が届かなかった人たちが… ↓



ハプニングを乗り越え、なんとかカーティン大学に到着。ホストファミリーのお出迎えです →



大学図書館で愛読書を発見?!



英語での授業。最初は大変でした…… →



キャンパスライフが楽しく
✓ なってきました



アボリジニの民族楽器を週末に体験→



学食でホストファミリーが作ってくれた
ランチボックスをいただきました ↓



だいぶ慣れて、余裕ができました



お昼時、格安か無料でホットドックが
← 食べられることも！



ロットネスト島、きれいでした。
そして、楽しかった！



もちろんカンガルーも、ウォンバットも見ました



でも、医療関連施設の見学などもしっかり行ない、
英語も自信がついて質問できるようになりました



あっという間に時間が過ぎ、実り多く
楽しい3週間の研修が終わりました



名残惜しいですが、ホストファミリーともお別れです（涙）

【編集後記】

今回はじめてこのプログラムに、帯同教員として参加させていただきました。出発前は、3週間でどれだけのものを学生たちは得られるだろうか、無事に最後まで過ごせるだろうかと心配が先立ちました。しかし、3週間で学生たちが環境に適応し、どんどんと自信をつけて、語学力も人間力もアップさせていくのを目の当たりにし、それらの心配はまったくの杞憂となりました。若い彼らの吸収力や可能性には目を見張ります。参加学生がこのような伸び伸びとかけがえのない体験を積めたのは、カーティン大学関係者の全面的なご協力と、信州大学および保健学科同窓会の資金面を含めたご支援、今回を含めこれまで11回にわたりこの素晴らしいプログラムを支えてくださった、医学部長や保健学科長をはじめとする保健学科教職員の皆様（なかでも、カーティンプログラム担当の皆様）のご尽力、そして、学生たちを快く送り出し、あらゆる面で彼らをバックアップしてくださった保護者の皆様のご協力のお蔭です。この場をお借りして、あらためて心より深く御礼申し上げます。

（文責、山崎浩司）

.....

「信州大学-Curtin University 大学間学術交流協定に
基づく平成 24 年度夏期海外単位認定プログラム 実施報告書」

2013 年 2 月 12 日

発行責任者:寺田 克

編集 :平成 24 年度夏期留学・単位認定プログラム担当チーム

発行 :信州大学医学部保健学科

.....